

Jazzの雑食性について

Jazzは時代、地域によってスタイルを変化させて存続してきました。

ジャズほど多様な方式、多彩な表現を包括する音楽は他には見当たらないのではないのでしょうか。

ジャズといふ、どこで出会ったかでその人の「ジャズ観」が決まります。

つまり、出会ったスタイル以外のジャズにはなじめなくなってしまうわけです。ディキシーランド以外はジャズではない、いやスウィングがジャズだ、やはりビバップだろう、フリーはどうなんだ……つまり「これがジャズだ」という誰もが納得する〈ジャズ全体〉の定義なるものは今のところ確立されていませんし、今後も確立しないでしょう。

しかし、「これはジャズではない」と誰もが感じる地帯は確実に存在します。ただしそこに明確な境界線を見つけるのは困難です。

ひとつだけ条件をあげるなら、「ジャズにはかならずインプロヴィゼーションが

含まれる」、これではないかと思えます。ジャズのスタイル変化はいくつかのきっかけで起こります。

他分野の音楽と出会ったとき。天才的な演奏者があらわれたとき。戦争などの社会的激変が起きたとき。テクノロジーが急激に発展したとき。

[I]

今日は他分野の音楽との遭遇について考えてみることにしましょう。

ジャズが他分野の音楽を拒否せず、容易にそのエッセンスを取り込んで新しい表現方法を作り上げることができたのはなぜか。

それは、ジャズがもともと異分野の結合によって発生したからです。

奴隷の故郷アフリカのリズムと旋律→労働歌・子守唄など

+

西洋音楽の和音→キリスト教会で触れる讃美歌など

このことはすでに皆さんよくご存知のことでしょうが、今一度原点に立ち返って アフリカ側を確認してみましょう。

1. アフリカのリズム→**ポリリズム** 単位となる拍を二等分したものと、三等分したものが同時進行する。
2. アフリカの旋律→主に**五音音階** **ペントトニック** 音階がシンプルなため、旋律を追いかけたり、別旋律でからんだりしやすい→即興の余地が多く いくつもの旋律が同時進行できる→**ポリフォニー**



[II]

カリブ海域諸島からの音楽との遭遇。

いわゆるラテン音楽ですが、ラテン音楽そのものがアフリカとつながりがあるのです。アフリカ系の音楽はすべて奴隷貿易によって世界に拡散したと言えます。

ラテン音楽にある様々な様式、ルンバ、マンボ、サルサ、メレンゲ、スカ、レゲエなどは、主としてリズムによって分けられるのですが、高音部で打たれるclave（クラーベ）の5音パターンが識別の鍵になります。代表的なクラーベを挙げます。

- 1) | x x ● x x ● x x | ● x x ● x x ● x |
- 2) | x ● x x ● x x ● | x x ● x x ● x x |
- 3) | x x ● x ● x x x | ● x x ● x x ● x |
- 4) | ● x x ● x x ● x | x x ● x ● x x x |

1) が 2-3 (two-three)、2) が 3-2 (three-two) と呼ばれる形。

3) は 2-3 を整った (洗練された) 形にしたもの。

4) は 3-2 を整った (洗練された) 形にしたもの。

低音部のベース、あるいはベースドラムのパターンとの組み合わせもまた重要な鍵です。

このことは、源流であるアフリカの打楽器群が高音部を受け持つ金属のベル (gankogui、agogôなど) と低音の太鼓 (djembeなど) のポリリズムから派生したものと考えて良いでしょう。

奴隷はアフリカ西海岸の部族王国からポルトガル、スペイン、後にイギリス、フランスの商人に買われてヨーロッパ、カリブ海域諸島、そしてアメリカへ送られました。中継地、たとえばセネガル西方500kmのカボヴェルデ (ヴェルデ岬諸島) ではアフリカ音楽とポルトガルのファドが混合してMornaと呼ばれる音楽が生まれたり、カリブ海の小アンティル諸島南部 (ヴェネズエラの沖) にあるスペイン領トリニダード・トバゴでは島のフォークミュージックと合体してCalypsoが盛んになりました。

カリブソはSony RollinsのSt.Thomasですっかりジャズファンのおなじみです。

(ロリンズの親は西インド諸島中のヴァージン諸島のひとつセント・トーマス島の出身です)



[III]

ブラジル音楽との遭遇

1960年代後半から70年代にかけて、bossa nova（新しい波）が商業的にヒットしました。ブラジルのサンバの前身と言われるchoro（ショーロ）との出会いから生まれました。ショーロはcry、lament、悲しみ、といった意味だそうです、19世紀のリオデジャネイロ圏で盛んになり、MPB（エムペーバー Brazilian popular music）の基になったものです。1975年に終結するベトナム戦争の泥沼に疲れたアメリカには癒しが求められていたのかも知れません。

[IV]

アラブ音楽との遭遇

Duke EllingtonのCaravan、Dizzy Gillespie のA Night in Tunisia などアラブ音楽の音階を取り入れた曲はいくつかありますが、アラブ音楽のもうひとつの特色であるリズムに着目した人は少ないでしょう。Dave Brubeckは5/4拍子やロマ（ジブシー）のリズム3/4+3/8拍子などを用いて作曲しています。

[V]

ユダヤ系音楽との遭遇

アメリカ音楽シーンを支えているコンポーザーにはユダヤ系が多いのは周知の事実です。そして彼ら自身、あるいは親の世代、もう一代前まで遡るとほとんどが ロシア、東欧、ドイツからの移民、避難民、亡命者です。

ユダヤ系コンポーザーのDNAには母親や祖母の歌った子守唄の旋律が埋め込まれていたのです。

ジャズが何でも飲み込んで同化してしまうことができるのは、もともと基盤が異種混合で成立したからだ、というわけです。

しかし、claveのところで見たように、都会の劇場、放送、レコードなど多くの人にわかりやすく鑑賞してもらう、つまり商業的に成功するためには「洗練」される必要があります。生命力にあふれた、混沌とした、あるいは呪術的な、という形容詞がつけられるような音楽は、一般受けしないものです。

ただ、「洗練」されてしまうとジャズは停滞します。スムーズジャズなどと呼ばれるようになるのが良いことなのかどうか。そうなるとジャズは何か未知なものと遭遇したくなるはずで。

そしてまた新たな活力を得る。で、次第に洗練され、停滞、といったサイクルを繰り返すのでしょう。

今日では世界各地でこのようなサイクルが進行しているはずで。

